

イスラーム・ジェンダー学科研 活動報告

◆実施概要

講演会「Social Impact of the Earthquake in Türkiye and Syria: Immediate Insights」

開催日時：2023年3月3日（金）午後3時30分～4時40分

開催場所：オンライン（Zoom）

使用言語：英語

講演者：ハカン・ギュレルジェ ハラン大学助教授（Dr. Hakan Gülerce, Harran University, Assistant Professor）

司会・コーディネイター：幸加木 文（千葉大学）

3:30-3:40 講演者紹介、概況

3:40-4:10 ハカン・ギュレルジェ ハラン大学助教授の講演

講演題："Social Impact of the Earthquake in Türkiye and Syria: Immediate Insights"

4:10-4:40 質疑応答

◆報告

2023年2月6日にトルコ南部で起きた大地震を受けて、被災地の一つであるトルコ南東部シャンルウルファ県にあるハラン大学社会学部のハカン・ギュレルジェ助教授にオンラインで講演頂く機会を設けた。シャンルウルファは被災地の中では比較的被害が軽度であったことと講演者自身に大きな被害がなかったことを確認し、社会学者の視点から現状及び今後の様々な問題について、地震発生後およそ1ヶ月が経つ時点での見解をお話頂いた。

はじめに、司会の幸加木より、ギュレルジェ氏の紹介と、現時点までの被害状況、及び被害が甚大となった原因と見られる建築基準とその認可、初動が遅れた救助体制を巡る政治的問題について概観を述べた。

次に、ギュレルジェ氏は、被災地の実際の被害とシャンルウルファの避難対応について説明し、特にトルコに暮らすシリア人難民（法的には一時的保護）の苦境を説明した。元々トルコ在住のシリア人は住環境も経済状態も悪く、コロナ禍に加えて今回の被災によってトルコ人以上に地震の悪影響を受けているとして、各種データに基づいてその状況を分析した。人道支援の受け取りにもトルコ人と差があると指摘しつつも、差別の増加というよりは、見えていなかった既存の差別が見えるようになったものと考えられると述べた。

また、シャンルウルファには家族のプライバシーを非常に重視する文化があるため、モスクや公民館等が避難所として開かれたが利用せずに、車内で過ごすことを選ぶ人々も多かった等、文化的価値観に根差した困難さを指摘した。さらに、同地の文化的傾向として、女性たちが自らのニーズを訴えることができず、現在も女性に必要な物資や支援が圧倒的に不足していること、さらに取材陣が子どもや女性に断りもなく撮影、放映することも重大な問題として指摘した。

被災から1ヶ月弱の現時点ではまだまだテント、シェルター（コンテナ）、食糧などの人道支援物資が不足しており、また被災者はショック状態にあり、特に子どもへの心理的支援が必須であると強調した。建物の復旧、地域経済の復興に加えて、今後も被災地への国際的関心、継続的支援、更なる議論が必要であると指摘した。ギュレルジェ氏自身も青年層のリカバリープロジェクトを立ち上げ、学生たちのケアに取り組んでいると述べ、トルコ・シリアの被災者の声となる機会に感謝するとして講演を締めくくった。

続いて質疑応答では、出席者より、現地の治安状況とメディアの問題点、他のムスリム諸国のNGOによるトルコ・シリアにおける支援のあり方や可能性、国際緊急援助の医療者に対するトルコ政府のコントロールの問題について質問があり、それぞれ重要な論点として理解を深める議論がなされた。

本会の主催者としては、震災を様々な立場のアクターがあたかも政争の具のように扱いがちであるトルコ国内及び国際メディアによる報道とは一線を画して、社会学的観点からの現時点での見解を伺う機会を持てたことは大きな喜びであり、重要な示唆を得ることができて有意義であった。なお、ギュレルジェ氏は本講演内容を後日、論文としてまとめ発表する予定とのことであり、本報告はご本人の了承を得て概要のみまとめたものである。

最後に、地震発生直後から被災者支援に奔走する中、講演を快く引き受け短時間で準備してくださったギュレルジェ氏と、トルコ・シリアの被災地への高い関心を持って参加してくださった方々に深い感謝の意を表したい。

（文責：幸加木 文）